

●●● 京都政策のシンクタンク「京都政策研究センター」を設置

京都府立大学では、京都政策のシンクタンクとして、このたび、新たな全学組織である「京都政策研究センター」を設置し、本格的な活動を開始いたしました。

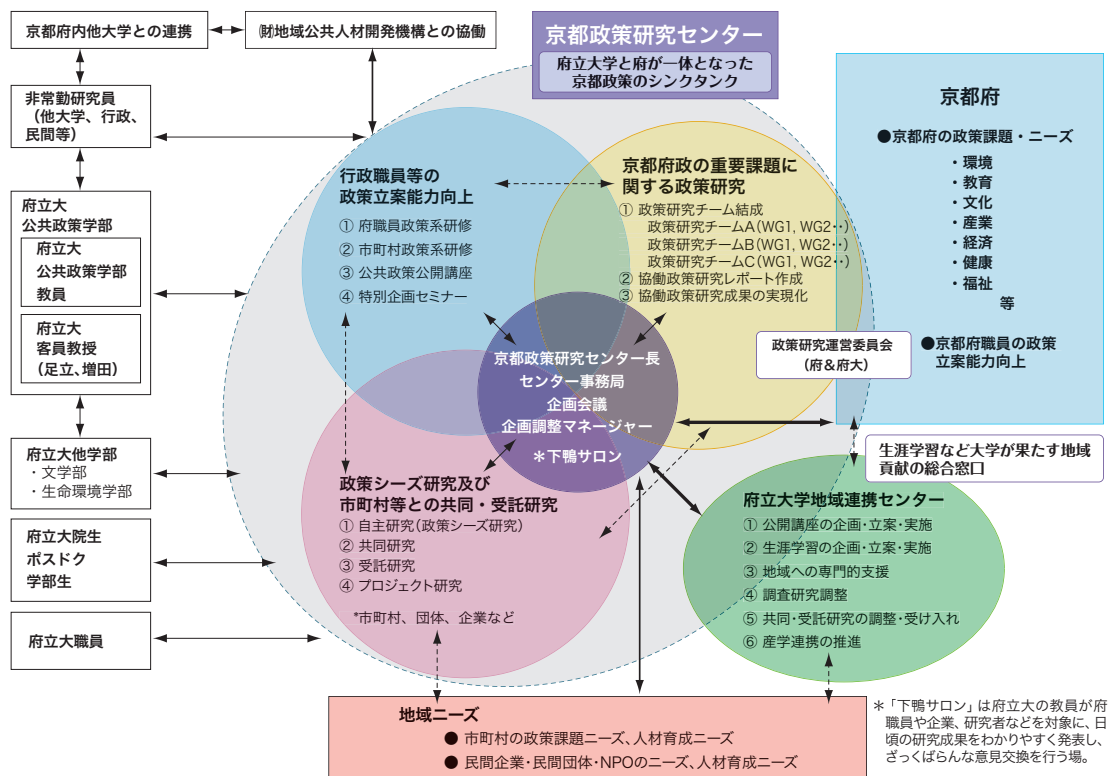
この組織の性格は、地域連携センターとの連携の下に、公共政策学部が中心となって運営する、全学的な「政策研究や政策系研修等の実施組織」として整備を図ったものです。

《センターの所掌事項》

- (1) 京都府政の重要課題に係る政策研究に関すること
- (2) 地方公共団体等との共同研究及び受託研究等に関すること
- (3) 行政職員等の政策立案能力等の向上に関すること
- (4) 政策研究の成果の府民等への還元に関すること
- (5) その他センターの設置目的を達成するために必要な事項



京都政策研究センターの機能概念図



目次

京都政策研究センター設置	1	生命環境科学研究科	8
行政との連携 (包括協定締結先との連携)	4	「北山から未来へ」開催	10
産学公連携への取り組み	5	文部科学省平成21年度大学教育推進プログラムに 選定	11
学部・研究科の取り組み		学生奮闘記-木匠塾	12
文学部	6	トピックス・イベント情報	12
公共政策学部	7		

センター長から

京都政策研究センター長 小沢 修司

この度、新たな全学組織として、長年京都府から要望のあった政策研究のシンクタンク機能を担う京都政策研究センターを立ち上げ、そのセンター長に就任することになりました。

センターの機能については、1ページのイメージ図を見ていただくとお分かりいただけるかと思いますが、京都府政の重要課題に関する政策研究、地方公共団体等との共同研究・受託研究や自主研究、行政職員の政策立案能力の向上に向けた取り組みを進めながら、研究成果を広く府民や社会に還元していこうというものです。

このうち、京都府政の重要課題に関する政策研究については、センター（大学側）と京都府側とで政策研究運営委員会を設けて協議調整を行いながら、協働研究を進めていくことになりますが、その際のポイントはテーマを定める時だけ協議をし後はセンターが研究を受け持つのではなく、あくまで大学の教員と府の職員が協働で政策研究を行うというところにあります。

また、政策研究のシンクタンク機能を担うという場合、誤解されやすいのは京都府の注文に応じ気に入られる政策提案のみを行うのではないかと、ということですが、そのつもりはありませんし府もそのような近視眼的な役割をセンターに求めているではありません。

府立大学と京都府の「協働」しあう建設的な関係を築きながら、広く日本社会や世界に向けた政策研究の拠点として発展させていきたいと願っています。



研究体制

- | | |
|------------|--|
| ①センター長 | 小沢修司公共政策学部長 |
| ②企画会議 | センターの所掌事項について企画し、協議調整
構成：(1) センター長
(2) 公共政策学部長
(3) 各学部・研究科から選出された各1名の教員
(4) センター長が学長の了承を得て必要と認められた者
・企画調整マネージャー 等 |
| ③政策研究運営委員会 | 京都府との政策研究に係る協議調整の場 |

協働研究テーマ（平成21年度）

■ 趣 旨

京都には、文化や環境などに対する優れた感性や他にはない強みがあり、また、長い南北軸や、農山村から大都市まで様々な地域個性が混在するなど、京都特有の歴史的、地理的、社会的条件がある。京都府と府立大学が深く連携し、これら京都の依って立つ基盤を分析し、京都の地域課題の解決や競争力を高める政策の研究、形成を行う。

■ 当面の協働研究テーマ

○ 持続的発展可能な、京都ならではの地域環境政策に関する研究

京都府が先進的な環境政策（リサイクル、温暖化対策、モデルフォレスト、自然環境の保全・活用等）を総合的に推進していくための基礎的な研究を行う。（企業やNPO、市民の協力体制、環境税のあり方等も含め、広く事例を収集、分析）

○ 府民福祉の新たな展開に関する研究

ユニバーサルデザインの実現等ノーマライゼーションに向けての諸課題や、家庭における様々な問題（例えば薬物依存、家庭内暴力、不登校、乳幼児虐待、生活保護等）に関する新たな支援のあり方など、府民福祉の向上を目指した新たな展開を、公共政策のあり方を探りつつ、さまざまな方向から研究する。

○ 地域力再生・活性化のための国内外政策事例研究

山田京都府知事が掲げる「地域力」再生を更に推進するため、国内外における「地域力」再生・活性化のための様々な政策事例を収集し、それらと府内の地域力再生事業などとの比較分析を含む地域力再生の総合的な分析を通じて、府内における新たな地域力再生・活性化に向けたシステム構築を模索する。

協働研究代表者から一言（今年度の取り組み方向など）

■ 環境チーム

2009年度の環境チームの取り組みの中心は、京都府地球温暖化対策課の要請に対応し、2010年2月に京都国際会館で開催される「京都環境文化学術フォーラム」に協力することです。フォーラムでは1つのセッションの企画を分担し、京都府が他府県に先駆けて取り組んでいる「モデルフォレスト運動」をテーマにします。環境チームのメンバーは、このモデルフォレスト運動に直接・間接に関わる諸研究を行います。具体的には、モデルフォレストそのものに関わる研究、京都の伝統的な暮らしの中に生きる環境対策に関する研究、森林・地下水資源の保全に関する税財政制度に関する研究、海外における森林環境保全システムなどの研究を進めます。（代表 青山 公三 公共政策学部教授）



■ 府民福祉チーム

「府民福祉の新たな展開」というテーマに関して、今年度は京都府と府立大学との間で、具体的なテーマ設定に向けた準備を始めているところです。8月に、関係者の顔あわせとは別に、府の担当部局の副部長をお招きしたざっくばらんな意見交換会を開催しました。これは、センター構想の中で「下鴨サロン」というネーミングがされている、府大教員の研究を素材とした交流の逆バージョンにあたります。今後は、交流の機会をさらに積み重ねる中から、府立大学と京都府との協働にふさわしい具体的な研究テーマの設定に進んでいきたいと考えています。（代表 築山 崇 公共政策学部教授）



■ 地域力チーム

地域力チームの2009年度の取り組みは、京都府府民力推進課からの要請で、京都府がこれまで3年間にわたり実施してきた地域力再生プロジェクト事業についての評価を行い、今後の事業展開を検討することが中心です。事業の評価を行うために、広範多岐にわたる分野の個別事業のヒアリング調査を本学担当教員が分担して行いました。また、調査の結果を踏まえ、これまでの事業の反省と問題点、課題を抽出し、今後の事業展開のあり方を探ります。地域力チーム担当教員は、自ら進めている諸研究にもこの成果を生かしつつ研究を進めるとともに、他府県、海外などでの課題解決の事例を収集分析し、京都府にフィードバックします。（代表 小沢 修司 公共政策学部長）

<平成21年9月8日 キックオフ交流会の、ひとコマ>

センター発足を記念して、去る9月8日（火）には、京都府と府立大学の間で円滑な協働研究の幕開けが図れるよう、相互の意思の共有と交流を図る場として「キックオフ交流会」を実施し、府からは、山田啓二・京都府知事をはじめ京都府幹部職員の参加を得て、活発な意見交流が行われました。（下の写真）

なお、当日の乾杯には、生命環境科学研究科増村講師が、産官学連携で佐々木酒造（株）などと研究開発された、ノンアルコールの米麴飲料の試作品がお披露目され、参加された皆さんに試飲していただきました。



行政との連携（包括協定締結先との連携）

京都府立大学では、フィールドワークなどを通じて、市町村、住民との協働の取り組みをすすめ、地域の活性化や地域力再生に貢献するため、包括協定を締結している宮津市と宇治田原町での活動状況を紹介いたします。

環境共生教育の実践としての地域での学び

生命環境科学研究科 地域・生活デザイン学研究室 三橋 俊雄 教授

三橋研究室では、宮津市との包括協定の一環として、2006年より、宮津市由良地区の活性化関連事業に取り組んでいる。本年2月には、1・2回生対象の教養教育科目・環境共生教育演習Ⅱ「伝統的ものづくり体験を通して環境共生を学ぶ（学生35名）」として、ワラ箸づくり、リサイクル紐のカゴづくり、ミカン餅づくり、ロープワークなどを、地元の方々にご教授いただいた。その演習に参加した学生の感想を紹介する。

「今回の2日間の演習で私の考え方が一変した。既に技術があふれる平成に生まれ、19年間過ごしてきた私たちは、日常生活をする中で無意識のうちに技術に頼ってきた。そんな中、今回、昭和の時代を知恵とその腕一つで生き抜いてこられた御年輩の方々の生き方を体験し、さまざまな感情が芽生えた。ものを大切にすること、工夫の素晴らしさに感動し、現代の私たちは自分の頭を使うことを怠っていたのではないかと再認識させられた。日頃、勉強に関しては頭を使っているかもしれない私たちが、それは机上のことだけであり、直接生活に関わっていただろうか？私はそんなことを考えさせられ、現状では人間だめになると感じた。もちろん、技術の進歩は良いことで、科学を学ぶ私たちが進歩を望むのは当然だが、日頃生きていく上での知恵とはまた違う。技術と知恵を使い分け、より良い人間環境をつくっていきたい。」学生たちの文面からは、想像以上に由良での体験が「生活のリアリティ」として彼らの心に深く響き、残ったようである。

また、9月には、生活デザイン演習Ⅴ「由良の自然を学び、由良の自然と遊ぶ（本学17名、滋賀県立大9名、宮津高校12名）」として、由良の里自然公園の整備（公園周りの散策道の整備を三橋が担当）、植物・昆虫調査と標本づくり（上家演習林事務長が担当、植物標本約50、昆虫標本約30を採集）、由良小学生との田舟遊び（由良の湧き水田んぼで収穫した稲を運ぶ「田舟」を、宮津高校建築科学生が3艘復元・制作し、当日は田舟の遊び方の指導を担当）を実施した。学生も地元の子どもたちも、大地に触れ自然の命に触れた三日間であった。

宇治田原町との共同研究の途中経過について

生命環境科学研究科 農業経営学研究室 中村 貴子 助教



直売所に掲示される保育所の給食だより

昨年から、宇治田原町立保育所あゆみのそのと、保育所を核とした地産地消の普及手法について研究している。研究パートナーは、栄養士の伴亜紀先生である。食育基本法が施行されて以来、市町村段階での食育推進基本計画をたてることが求められているが、宇治田原町では制定されていない。しかし同保育所での食育活動は、全国レベルでも先進的取組として注目されてきた。次のステップとして、家庭でも地産地消を推進してもらうための方策が必要であると考えている。保育所では、子どもたちの食育体験および直売所における給食レシピの掲示と配布を実施している。現在、私たちは、食育体験を実施した園児の保護者および直売所でのアンケートを通じて考察しているところである。保護者においては、地産地消という言葉の意味を知っていたのは、47.5%とやや低い。子どもの食育体験実施後の意識として、「地元産の野菜をできるだけ購入しようと思う」は31.3%であり、「近隣の畑に何ができているか見るようになった」という回答が17.4%、「地元産の野菜を購入するようになった」という回答が12.1%であった。一方、直売所でのアンケートにおいては、地産地消という言葉の意味を知っている人は64.1%とやや高く、店頭の保育所の掲示を読んでいる人は15.2%で、その年齢層は、30歳代と50歳代でやや高いという特徴がみられ、子・孫として保育児童がいる世代といえる。今回は、両取組の直接的な関連についての研究はできていないが、アンケート結果から、子どもの食育教室参加後の保護者の意識が高いうちに、直売所へ行く手法を提案することで、地産地消が広がるのではないかと推察できた。こうした研究結果の積み重ねが、宇治田原町の今後の食育推進に役立てられれば幸いである。

産学公連携への取り組み

京都府立大学地域連携センターでは、産学公連携活動の一環として、各種イベントにおいて大学の研究をわかりやすく紹介したパネルや展示品を出展して、積極的に大学の研究内容を「情報発信」しています。

京都府立大学のブースへお越しの方々からは、研究内容へのご質問やご相談をいただき、後日、大学までお訪ねいただく方もおられます。また、「新聞に載ってたのはどの展示？ いつから販売されるの？」と熱心にお聞きになる方、「京都府立大のブースがあるのでびっくりした」と卒業生の方、「子どもが、孫が、京都府立大学を受験するんや」と話される方など、いろいろな方々に来ていただいています。

平成21年度に出展しました各種イベントの概要を紹介します。地域連携センターは、今後も地域と大学を結ぶ窓口として『地域が大学を育て、大学が地域をおこす』活動を行って参ります。



◎第8回産学官連携推進会議（6月20日、21日：国立京都国際会館）

- ・ダチョウによる新たな抗体作製技術を用いた鳥インフルエンザ防御用素材の開発〈塚本 康浩 教授〉
- ・メール文章等に表れる感情を判定し、CG顔画像で順次提示するシステムの開発〈吉富 康成 教授・田伏 正佳 准教授他〉



◎第4回けいはんなビジネスメッセ（7月16日：けいはんなプラザ）

- ・京都植物バイテク談話会の活動（府立大学・京都府農林水産技術センター生物資源研究センター）〈椎名 隆 教授・増村 威宏 講師他〉
- ・ダチョウによる新たな抗体作製技術を用いた鳥インフルエンザ防御用素材の開発〈塚本 康浩 教授〉
- ・地域連携センターの活動紹介

◎外食・中食設備機器フェア2009（9月9日～11日：インテックス大阪）

- ・食卓における色彩の効果（給食トレイの色が喫食者に与える心理的效果）
〈大谷 貴美子 教授・松井 元子 准教授・富田 圭子 助教〉
- ・京都宇治特産の抹茶製造時における副産物を利用したテアニン豊富な加工食品〈本杉 日野 准教授他〉
- ・数種類の食中毒菌に対応させたダチョウ抗体入り納豆だれ〈塚本 康浩 教授〉

◎中信ビジネスフェア2009（10月14日、15日：京都府総合見本市会館）

- ・作物遺伝資源を活用した地域ブランド農作物の開発〈本杉 日野 准教授他〉
- ・地域連携センターの活動紹介

◎全日本科学機器展in大阪2009（10月21日～23日：インテックス大阪）

- ・作物遺伝資源を活用した地域ブランド農作物の開発〈本杉 日野 准教授他〉
- ・アトピー性皮膚炎の鎮静化剤〈宮崎 孔志 准教授〉
- ・タンパク質の分析技術を米の加工へ利用する研究〈増村 威宏 講師〉
- ・地域連携センターの活動紹介



◎第13回異業種京都まつり「テーブル交流会」 （10月22日：京都全日空ホテル）

- ・作物遺伝資源を活用した地域ブランド農作物の開発〈本杉 日野 准教授他〉
- ・地域連携センターの活動紹介

◎京都産学公連携フォーラム2009（11月5日：京都工業会館）

- ・教員によるシーズ発表と技術交流
 - アトピー性皮膚炎の鎮静化剤〈宮崎 孔志 准教授〉
 - タンパク質の分析技術を米の加工へ利用する研究〈増村 威宏 講師〉
- ・地域連携センターの活動紹介



学部・研究科の取り組み

文学部

府立総合資料館との連携によるトークセッション「古典籍は愛だ—直江版『文選』とその水脈」の開催

日本・中国文学科 小松 謙 教授

8月8日（土）、京都府立大学大学会館でトークセッションを開催いたしました。

文学部日本・中国文学科では、2007年以来、府立総合資料館に所蔵されている貴重な古典籍を府民の皆さんに広く知っていただくために、同館と共同で京都新聞に「古典籍をあじわう」（2008年4月以降は「古典籍へようこそ」という記事）という記事を連載するとともに（日本・中国文学科の教員は、この連載における地域社会への貢献を評価されて、本年6月に理事長表彰の対象となりました）、2008年以来、同館における書籍の展示会にあわせてシンポジウムを開催してまいりました。



本年は、「古典籍は愛だ—直江版『文選』とその水脈—」と題して、直江兼続が活字で刊行したといわれる同館所蔵の『文選』をめくって議論をしました。竹葉学長の開会あいさつの後、まず林香奈准教授が『文選』の内容を紹介し、続いて山崎福之教授が、『文選』が日本においてどのように受容されてきたかを説明しました。次に、特にご参加いただいた奈良大学文学部の河内将芳教授が、戦国時代において上杉家が京都で行った活動について論じることにより、直江本『文選』の位置づけを示しました。

休憩をはさんで後半は、活字印刷を中心に論じました。まず小松が、中国で発明された活字が権力者による大規模出版と、個人による少数数出版という形で展開していったことを述べ、続いて府立総合資料館の松田万智子資料主任が資料館所蔵の活字本について説明する中で活字本の性格を具体的に示し、最後に藤原英城准教授が、江戸時代に営利出版が成立する過程で活字から版木を使う印刷へと変わっていったことを論じました。最後に、参加者の皆さんから数多く寄せられた質問に答えながらのディスカッションを行った後、資料館の井口和起館長によるあいさつで閉会となりました。

当日は、約90名の参加者があり、アンケートの結果も好評でした。日本・中国文学科では今後ともさまざまな形で地域に貢献すべく、努力を続けてまいります。

「ひらめき☆ときめきサイエンス」を開催!

欧米言語文化学科 青地 伯水 准教授

9月6日（日）13:00から合同講義棟・第4講義室で、科学研究費に基づく高校生のためのプログラム・ひらめき☆ときめきサイエンス「映像で学ぶ二つの大戦期間のドイツの歴史」を参加者23名と学術振興会からの視察員3名とともににぎにぎしく開催しました。

プログラムは、私の講義「映画『サウンド・オブ・ミュージック』にみるオーストリア・ドイツ関係」で始まりました。（この詳細は、野口祐子編著『「サウンド・オブ・ミュージック」で学ぶ欧米文化』（世界思想社・近刊）の青地伯水の章をご覧ください。）クッキータイムでは、大宮商店街にあるウィーン菓子「マウジー」のケーキをみなで味わいながら、共同研究員・浅井麻帆が、ナチス時代の建築にいたるまでのヨーロッパの建築の歴史を、また共同研究員・寺井紘子は、ナチス時代の「退廃芸術」とその当時礼賛された芸術の比較を、それぞれパワーポイントを用いて展開しました。また、横道誠講師の講義「ナチスが用いたプロパガンダ」では、ナチス時代のプロパガンダ映像が、マイケル・ジャクソンのプロモーション・ビデオに、いやそればかりか浜崎あゆみや椎名林檎といったアーティストにまでも影響をあたえていることが、動画とともに説明されました。高校生はみな教員の講義に耳を傾け、映像に目をみはっていました。

つづいて大学院生・学部生を交えた自由なディスカッションをおこない、その後、各受講生に「ドイツ文化未来博士号」を授与しました。アンケートの結果から、楽しいだけでなく、高校生にとって実り豊かな時間であったことがわかりました。できれば来年度も内容をあらためて実施してみたいです。また、平成22年3月13日（土）には、ACTRのシンポジウム「祇園祭からウィーン分離派まで—京都のなかのドイツ文化」を第7講義室で予定しています。こちらもどうぞよろしく。



公共政策学部

第1回地域協働オープンワークショップを終えて

公共政策学科 青山 公三 教授

〈地域協働オープンワークショップの開催〉

公共政策学研究科では、平成21年度前期に大学院の授業の一環で「地域協働オープンワークショップ」を開講しました。このワークショップは、公共政策学研究科の「地域社会論演習Ⅰ」をそれに充てたものです。平成21年5月8日に開講し、8月7日までの3ヶ月間、13回にわたり、府立大学の院生（生命環境科学研究科の2名を含む8名）をはじめ、一般市民の方々（5名）、府・自治体関係者の方々（4名）、検討テーマに関係する地元の方々（8名）、そして非常勤講師陣（4名）など、合計29名がワークショップを行いました。

この「地域協働オープンワークショップ」は、大学院の授業を公開講座化し、単に講義を行うだけでなく、地域の具体的な諸課題をテーマに、その解決策を府立大の院生と地域の方々が協働で検討したものです。

〈ワークショップ開催の準備、テーマの選定〉

ワークショップに先立ち、まず平成21年2月にワークショップで検討するテーマを広く府民から募集しました。どれだけテーマ応募があるか心配でしたが、13件の応募があり、その中から2件の検討テーマ（「地域におけるボランティアネットワークの構築」「北山街の活性化戦略」）を選びました。テーマ決定後、平成21年4月に府民や行政職員、大学院生等への参加募集を行い、上記の参加を頂きました。そして平成21年5月8日から13回にわたり、2チームに分かれてワークショップを開講してきたものです。

〈「地域におけるボランティアネットワークの構築」チーム（以下ボランティアネットチーム）〉

「地域におけるボランティアネットワークの構築」は、左京区の高野地区を中心に福祉関連サービスを行っている団体から提案されたテーマでした。当初は高野地区を対象にしてワークショップを行う予定でしたが、開催にあたっていくつかの問題もあり、最終的に一般的な地域でのボランティアネットワーク構築を提案することに致しました。ボランティアネットチームは、府立大院生、他大学の社会人院生（元地方公務員）、病院で看護師の仕事を持つ本学4回生、府職員、テーマを提案した団体のメンバーなど10名で構成されました。

このチームでは、まず先進的取り組みをしている団体の方々にゲストスピーカーに迎え、4つの貴重な経験談を聞きました。そしてその上で、地域でボランティアネットワークをいかに構築するのかを検討し、『「みんな笑顔」元気交流プロジェクト』『輝けシニア塾』『子供たちから未来へのメッセージ』『子ども地域文化塾』『医療専門家の地域ボランティアネット』の5つの提案を纏めました。これら提案の中から「京のチカラ・明日のチカラコンクール」に応募したところ、『医療専門家の地域ボランティアネット』が最終選考に残り、「優秀賞」を山田京都府知事から頂きました。



白河総合支援学校校長の森脇先生の話聞くボランティアネットチームメンバー

〈「北山街の活性化戦略」チーム（以下北山街チーム）〉

「北山街の活性化戦略」は北山街協同組合から提案されたテーマです。北山街協同組合は設立20周年を迎え、今後の新たな展開を府立大学との連携で考えたいというものです。折しもこのエリアは、京都府が北山文化環境ゾーンとして今後の新たな展開を検討している地域でもあり、そこへの提案もしたいと考えました。

北山街チームは、非常勤講師にお願いした方々3名を含め総勢19名になりました。府立大院生は生命環境科学研究科からも2名の参加を得て計6名が参加しました。その他、下鴨地域に住む市民の方々、福知山市の職員、府職員、北山街協同組合のメンバーの方々など、多彩なメンバーでのスタートでした。人数が多いため、チームをソフトとハードの2グループに分け、最後に提案をドッキングするという方法で実施しました。

数えきれないくらいのプロジェクト提案が出されました。ここで紹介する紙幅はありませんが、府立大学も含む北山地域一帯の将来的な展望を、色々な立場の方々が自由に議論したことは大変有意義でした。

〈おわりに〉

来年度も今年の反省を踏まえて、ぜひ実施したいと考えています。皆様のご協力をよろしくお願い致します。

生命環境科学研究科

京都府における森林資源利活用のためのサイエンスとテクノロジー

環境科学専攻 生物材料物性学研究室 古田 裕三 准教授

森林は、国土の約2/3を占め、生物にとってはなくてはならない存在である。京都府におけるその割合は約3/4と全国平均よりさらに高く、この割合は長野県のそれに匹敵する。したがって、京都府と森林の縁は極めて深い。林業の衰退が主な原因となって山は荒れ放題である。森林がこのような状態では、二酸化炭素吸収源として期待できなくなるだけでなく、生態系の悪化、水源の枯渇化、土砂災害の多発化など、地球環境全体の悪化が懸念され早急な対応が望まれている。そのような中、平成14年に、京都府では、山田知事の下、“緑の公共事業”を立ち上げ、健全な森林の育成や森林資源である木材利用の推進などを府民一丸となって力を入れるとともに、“環の公共事業”によって、森林資源の有効活用をも含めた環境配慮型の公共事業を推進している。この事業には本学森林科学科教員や学生も多く協力するとともに、私も京都府参与としてアクションプラン作りからその評価に至るまで関わっている。これに対して、京都府における木材利用、特に主要木材であるスギ材を高度利活用するための取り組みが数多くなされてきた。我々の学科や研究室でもその一端を担い、日々培ってきたサイエンスをテクノロジーに活かし、いくつかの成功をおさめたので以下に一例を紹介する。

スギ材は比重が0.3程度と木材の中では極めて小さいため、硬度が低く、建材などに利用しようにも傷が付きやすい、強度が低いなど、欠点が多くほとんど利用されない。これに対して、一般に床板などに用いられるブナ材やナラ材では、比重や硬度もスギの倍以上あり、スギ材を床板として利用するためには、スギ材をこれらの材と同程度以上の比重や硬度にする必要がある。そのためには、細胞からなるスギ材を圧縮して密度を上げて硬度



写真1 木材の不思議
(入るはずもない穴に木材が通る?)

を増やせばよいのだが、後々の温湿度変化によって変形が元に戻ってしまうため不可能であった。ここで、写真1を見ていただきたい。なんと、瓶の中に木のお守りが、ハートの穴に木の矢が入っている。これらは、瓶を後から作ったり、木を削ったり接着剤でついたりしていない。では、どのようにすれば入るはずもない瓶の口やハートの穴に木材が入るのであろうか？ 答えは簡単で、前述の木材の特性を利用したのである。つまり、「スギを圧縮して瓶の口やハートの穴に入れ、圧縮した部分を温水に漬けて戻し乾かした」のである。身近な例に例えると、寝癖のついた髪の毛をお湯で元に戻したのと同じことである。

一方で、本研究室では、木材の物理化学的な性質を中心に研究してきた。その中で、木材に施した変形は、200~260℃程度の高温が一定時間作用すると、熱水をかけた程度では元に戻らないことを示すと同時に、その科学的根拠について、熱力学的な観点から説明することに成功した。これらの科学的シーズ・知見をもとに、本学ACTRを中心とした産学公連携の共同研究開発によって、スギ材をブナ材やナラ材なみの材質にし、床板のJAS規格をもクリアする製品を製造するに至った。また、強度が弱く、材質にばらつきが多いスギ材を、薄い単板にした後、再度積層することによってあるいは靱性の強いタケと複合することによってその強度と信頼性を向上させ、軸材料に設計・使用する技術にも成功している。写真2は、これらの技術を応用した製品の一例である(右:京都府の公営住宅集会場に導入された圧縮スギ単板を用いた床板、左:府民の森ひよしに設置されたスギ単板により製造した展示用ガードレール)。

ここに紹介した事例でもおわかりの通り、当研究室では、生物材料に関わるサイエンスを中心に研究を行い、得られたシーズや知見を必要に応じてテクノロジーに提供・変換するというスタンスで研究を行っている。これらが、今後も京都府を中心とした地域社会、さらには社会全体に浸透し、循環型社会の形成の一助になれば幸いである。



写真2
高度スギ加工材の京都府における使用例

食保発 地域の方々を対象にした学生セミナー

～若い感性が参加者の心に響きます！～

応用生命科学専攻 食事科学研究室（食保健学科） 富田 圭子 助教

食保健学科では、管理栄養士や栄養教諭、家庭科教諭といった人を対象にした職業に就く学生が多いことから、食に関する知識を身につけることに加え、対象者に合わせた適切な教材を作成する柔軟な発想力や創造力、その時々状況や対象者の理解度を的確に把握して伝達するためのコミュニケーション能力の向上に力を入れています。

3年生の専門科目である栄養教育論実習では、実践能力を養うために、地域の方々や近隣の幼・小・中学生等を招いた食育講座を実施しています。これは本学学生が講師になり、与えられたテーマにそったセミナー（食事付）を計画・実施していくというもので、1つのテーマを約5名で担当し、年間5種類ほどのセミナーを開催していきます。学生は媒体作成から発表練習、試作調理（献立作成・盛付・サービス）に至る作業を教員からOKがもらえるまで何度も繰り返しおこない、本番当日を迎えます。この実習は2004年から開催して今年で6年目になりますが、地域の皆様には好評をいただき、双方にとって非常に良い教育効果を生んでおります。

その効果を生みだす一番の要因は、本実習がロールプレイングではなく、地域の方々の本気で学びに来てくださる「本番」というところにあります。学生には自覚を持って実施してもらわなければならない、妥協も失敗も許されません。そのため学生全員、惜しまぬ努力をします。もちろん学生にもプライドがあります。足を運んでくださる参加者への想いもあります。それらの緊張感と責任感が本授業の教育効果を向上させ、同時に受講して下さった対象者に満足感を与えているのだと思います。今では、セミナーの依頼まで頂戴するようになり、学生は更なるプレッシャーを感じているようです。

地域の方々を巻き込んだこのセミナーは、想定外の効果も生みました。たとえば、地域の方々は学生の真摯な態度に感動し、学生を地域で応援しようという気持ちを育んでくださいます。また日ごろ若い人と触れ合う機会が少ない高齢者にとっては、若さというエネルギーをもらえるのだそうです。「こんなに一生懸命に教えてくれて、頑張って食生活を改善しようと思いました」といってくださる方や、「大学が身近になりました」と喜んでくださる方もおられました。一方、小・中学生たちにとっては、堂々とした大学生の姿が憧れの存在になり、近い将来の目標になるのだそうです。正にオープンキャンパスです。また、教員も例外ではありません。学生の成長に感動して涙したり、教育に真摯に向かう大切さを改めて実感したり...。セミナーを通した様々な波及効果は、この実習の第2の魅力でもあります。

対象者に栄養教育をすることは管理栄養士の必須の仕事です。しかし、知識の押し付けにとどまり行動変容に繋がらない教育では良い栄養教育とは言えません。そのためにも、学生と共に幅広い食の見識力を身につける努力を惜しまず、地域の方々の協力を得ながら、今後も高みに向かって歩いていければと考えております。



「くびれ自慢な鹿ヶ谷かぼちゃとメタボな賀茂ナス 今日（京）からはじめようメタボリック対策」と題したセミナー。メタボセミナーは今回で2回目。定員を上回る50～90歳台の応募者を得、リピーターも。学生は紫の便座カバーをかぶって賀茂ナスになりきり、体当たりのセミナーを実施。参加者は笑ったり頷いたり。楽しく美味しい充実の一日でした。(2008/11/27)



「冬至ってなあに？」5歳児対象のセミナー。お土産に渡したゆずの香りを嗅いでいるところ。食文化の香りがしたかな？(2007/12/6)



野菜が嫌いな幼児を無くすために作った野菜たっぷりのトトロランチ。学生が「野菜が大好きになるトトロ劇」を演じたところ、なんと！誰一人残さずに食べました！可愛いですね！(2008/10/2)

「北山から未来へ」開催

—京都府立総合資料館、京都府立大学、京都府立植物園「連携包括協定」締結記念事業—

ここ、北山の地には、府立植物園、陶板名画の庭、総合資料館や府立大学、市立のコンサートホールなど、地域の景観と調和した文化施設群があります。

この地で発展してきた府立植物園、総合資料館、府立大学の3機関は、本年3月に相互の連携に関する「包括協定」を結びました。これまで以上に、相互の人的、物的、知的資源の交流を進めることにより、地域や社会にいつそう貢献することを目指したものです。

この「包括協定」締結の具体化をはかる第一歩として、この地域が今後、京都に関する学術・文化の発信拠点として発展することを目指して北山地域の歴史を振り返りながら、府民のみなさんとともにその未来を展望するため、地域の関係機関・団体と一緒に、11月を中心とする期間に、多くに共同事業を開催しています。

11月3日に開催したシンポジウム「古都のイメージ大解剖川端康成の『古都』を手がかりに」について、シンポジウムを企画した文学部の野口祐子教授からの報告です。

文学部欧米言語文化学科の野口祐子です。この4年間、10名のチームで京都とヨーロッパ主要首都のイメージを比較する学際的な共同研究を続けてきましたが、今年4月から府立大学と、隣接する府立総合資料館・府立植物園の3機関連携が発足したのを機に、植物園と総合資料館との共同研究「20世紀の京都における文化と景観に関する学際的研究---下鴨・北山地域を中心に」を立ち上げました。これは府立大学の地域貢献型特別研究（ACTR）として実施した1年間のプロジェクトで、文学部の浅井学・野口祐子（欧米言語文化学科）、赤瀬信吾（日本・中国文学科）、上杉和央（歴史学科）、生命環境科学研究科の大場修の各教員と、総合資料館の西村隆・松田万智子資料主任、植物園の松谷茂園長というメンバーで構成されています。



このプロジェクトでは地元の下鴨・北山地域の景観の変遷と京都の中での文化的位置づけに関する研究と、それと平行して古都イメージの研究を行っています。その中間報告として、11月3日に本シンポジウムを府立大学で開催しました。プログラムは以下の通りです。

- 1 イントロダクション---『古都』に見る京都のイメージ（文学部 野口 祐子）
- 2 『古都』の幻影---川端康成にとっての京都（文学部 赤瀬 信吾）
- 3 『古都』の花と木---京都らしさを演出する植物たち（府立植物園園長 松谷 茂）
- 4 外から見た『古都』---日本文化のガイドブック（文学部 浅井 学）
- 5 『古都』の北山---その歴史と文化（府立総合資料館館長 井口 和起）

このシンポジウムでは、京都の市中と北部の北山杉の里が重要な意味を持つ川端康成の小説『古都』を題材に、京都のイメージ形成のあり方を考えました。まず野口が『古都』の舞台となった昭和36年当時の京都と、川端康成が描き出した古都イメージを比較し、続いて赤瀬教授が川端康成の作家性と『古都』の関係进行分析し、松谷園長からは『古都』に登場する様々な植物と北山杉、そして『古都』にも描かれる植物園の見どころについてのお話、浅井准教授からは映画化された『古都』の岩下志麻版・山口百恵版・上戸彩版を比較して京都の描き方の変遷が意味するものを探る発表、井口資料館館長からは、現地調査に基づいた北山杉の里の変遷についてのお話をいただきました。

当日は210名の方が熱心に聴講され、アンケートでも「楽しかった」「京都を見つめ直す機会となった」といった声が多く寄せられ、好評をいただきました。「今後も3機関が



連携して研究を進め、シンポジウムなどを催してほしい」という要望も多く、府民の期待の大きさが伝わって、身の引き締まる思いです。また京都市在住の方で「今回初めて府大に来た」、「府大はもっと存在をPRすべきだ」といった御意見もあり、今後、このようなシンポジウムの開催等、研究成果等の情報発信をより積極的に行っていきたいと考えています。

なお、3機関連携記念のイベントは、府立総合資料館での企画展「北山の歴史をふりかえる---資料館・府立大学・植物園の昔と今」（11月29日まで）などを開催していますので、この機会に是非、北山文化ゾーンの魅力を発見して下さい。

文部科学省の平成21年度大学教育推進プログラムに食保健学科の取組「実践と交流を通じて高める食の専門家力」が選定されました。

文部科学省の平成21年度大学教育・学生支援推進事業【テーマA】「大学教育推進プログラム」に、本学生命環境学部食保健学科の取組が選定されました。

大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムは、大学・短期大学・高等専門学校から申請された、学士力の確保や教育力向上のための取組の中から、達成目標を明確にした効果が見込まれる取組を選定し、広く社会に情報提供するとともに、重点的な財政支援を行うことにより、我が国の高等教育の質保証の強化に資することを目的として、平成21年度から開始されたものです。

全国の大学、短期大学、高等専門学校から、649件の応募があり、96件（公立大学では8件）が選定されました。

本学の取組「実践と交流を通じて高める食の専門家力」では、学生を少人数のグループに分け、地域の幼稚園、小・中・高等学校、地域住民と連携・交流しながら、それぞれの対象が抱える現代的課題（例“生活習慣病の予防のための健康食”など）について、その解決のための指導を行うことにより、学生が「学ぶ主体」から「教える主体」となり、課題探求能力やコミュニケーション能力の育成を図ります。

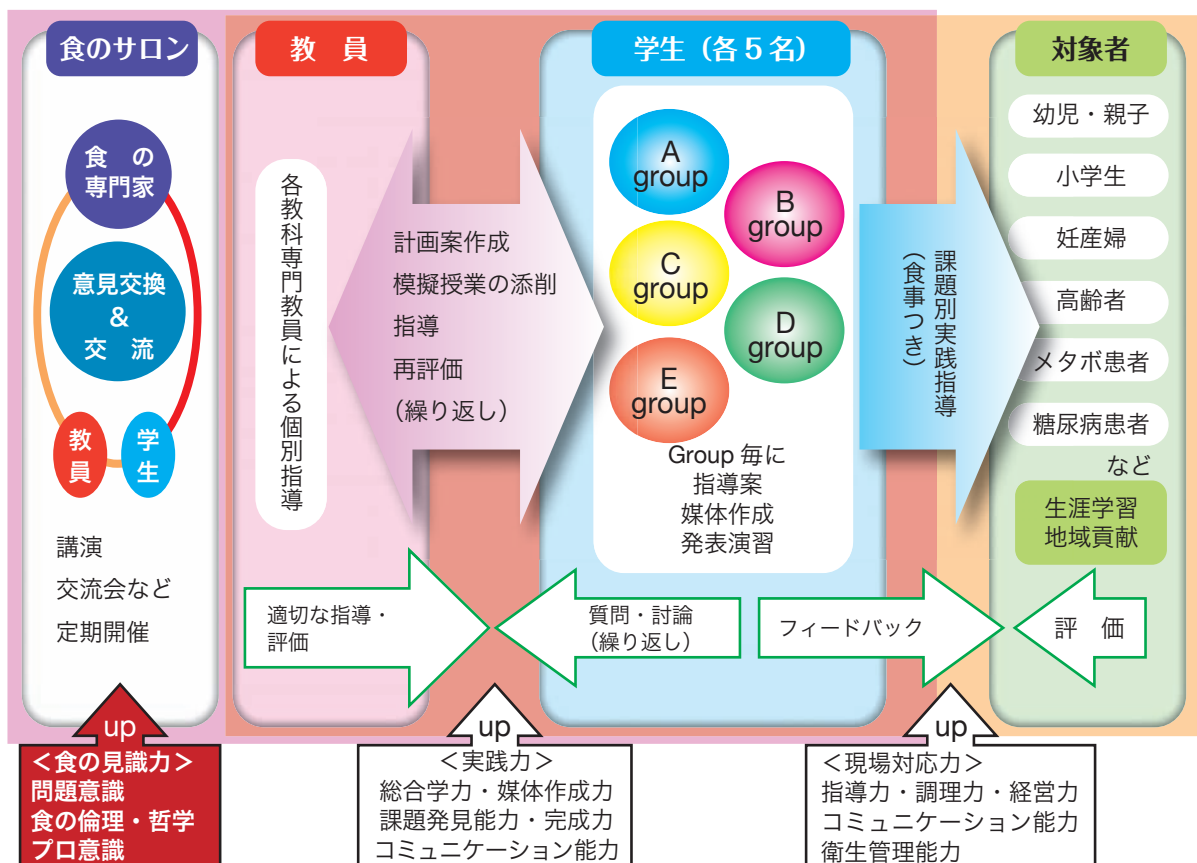
さらに、学生だけでなく食に関わっている教員の視野を拡げるために、他学科の教員を始め、地域の食に関わるプロ、また卒業生との交流（食のサロン）を行います。

審査結果における「特に優れた点」として、次のとおり評価を得ました。

- ・「食育」の現代的な重要性がよく認識されており、その課題に対する大学の意欲的な取組として評価できる。
- ・すでに3年間にわたる試行段階での実績があり、その成果を踏まえた実現可能性の高い取組となっている。
- ・地域とのネットワークを活用して、病院、学校等での実習において、少人数で、きめ細かな実習指導を行う点は優れている。

○取組担当者 生命環境科学研究科 教授 大谷 貴美子 准教授 松井 元子 助教 富田 圭子

実践と交流を通じて高める食の専門家力



学 生 奮 闘 記 木匠塾

こんにちは。木匠塾です。木匠塾は全国各地で地域貢献のために木材を使って、ものをつくる活動をしています。京都府立大学ではもともと授業（環境共生教育演習Ⅰ）の演習のひとつに木匠塾があったのですが、2009年からサークル化し学生主体で活動しています。これまで、京都府南丹市美山町で地域の人々と協力しながら休憩所や、看板、パーゴラ（藤棚）を地域の木材を用いて自分たちの手で作りしました。主な活動は夏休みに美山町で作業することですが、メンバー全体仲がよく、たまに集まって食事に行ったりもしています。



この木匠塾の魅力は美山の大自然とふれあいながら

自分たちの手で制作物のデザインを考えたり、木材の加工や施行をすることにより、大きな達成感が得られることです。メンバーには木に興味のある森林科学科の学生や、デザインに興味のある環境デザイン学科の学生が多数います。日頃の学生生活のなかではなかなか実際に木材に触れ、物をつくる機会はないので、木匠塾の活動を通して得られる知識や経験は非常に大きいと感じています。木が好きな人、ものづくりが好きな人、デザインに興味がある人、自然が好きな人、ぜひ木匠塾に参加してください。

（文： F・R 木匠塾代表 生命環境学部 環境デザイン学科2回生）

トピックス

★2008年度人間環境学部環境デザイン学科住環境学専攻卒業生 佐野朱美さんが日本建築学会「優秀卒業論文賞」を受賞

卒業論文「北山杉の里集落の景観と民家形式－京都市中川地区の集落景観の構成と特徴－」が日本建築学会で1989年から行われている学生を対象にした論文の表彰事業で、優れた論文として顕彰されました。

★公共政策学研究科福祉社会学専攻博士後期課程2回生の瀧本知加さんが日本産業教育学会「桐原賞(奨励賞)」を受賞

研究テーマ「専門学校における職業教育・キャリア教育の検討－縦断的調査を通しての再検討－」に基づく業績が表彰されました。

★京都府立大学国中国文学会発行の「和漢語文研究」が「蘆北賞」を受賞

文学部日本・中国文学科を中心として運営する京都府立大学国中国文学会発行の「和漢語文研究」に対して財団法人橋本循記念会から第19回蘆北賞が授与されました。

★生命環境科学研究科応用生命科学専攻の沼田宗典准教授が

「HGCS Japan Award of Excellence 2009」を受賞

日本化学会のホスト・ゲスト・超分子化学研究会の設けている賞で、当該分野で活発に研究を行う45歳程度の若手研究者の中から毎年2名選ばれており、今年で5回目になります。

イベント情報

第5回 3大学連携研究フォーラム開催

「ヘルスサイエンスの総合化－異分野融合研究の展開と展望－」

- 日時 平成21年12月8日(火)13時30分～
- 場所 京都府立医科大学図書館ホール
- 主催 京都府立大学、京都工芸繊維大学、京都府立医科大学、京都府

戦略的大学連携支援事業

第2回 教養教育フォーラム開催

「学生と共に考える教養教育のあり方」

- 日時 平成21年12月19日(土)13時30分～
- 場所 京都府立大学 合同講義室棟3階 第3講義室
- 主催 京都府立大学、京都工芸繊維大学、京都府立医科大学、京都府